

第106回 弘前医学会総会

〔日時：令和5年6月3日(土) 14:00～〕
〔会場：プラザホテルむつ〕

一般演題抄録

I-2 冠動脈非造影 Magnetic Resonance Angiography 有用性の検討

○竹川鉦一¹⁾、宗近宏次¹⁾、鷺野谷利幸¹⁾、劉文翰¹⁾、小野正博²⁾、川村敬一²⁾、菅野恵³⁾、緑川博文³⁾、中澤誠⁴⁾、森島重弘⁵⁾、山崎秀和⁶⁾、今野孝志⁶⁾、千葉義弘⁶⁾
(総合南東北病院 放射線診断科¹⁾、同循環器内科²⁾、同心臓血管外科³⁾、同小児・生涯心臓疾患研究所⁴⁾、同小児科(心臓外科)⁵⁾、同診療放射線科⁶⁾)

目的：冠動脈非造影 Magnetic Resonance Angiography (以下MRA)を施行した症例の経過を追跡し検査後の冠症候群発症の有無および診療方針決定への寄与について検討すること。

症例および方法：2016年7月から2021年8月の間に施行された症例は50例である。MRA後の追跡期間および平均値を調べた。MRA施行により冠動脈有意狭窄が指摘されなかった患者の検査後の急性冠症候群発症の有無、MRAによる診療方針決定に対する貢献度を調べた。また死亡症例のMRA後の期間および死因も調べた。

装置はGE 1.5T、心臓用32 channel coil、ソフトは3D Heartを使用した。

結果：50例の内、死亡および追跡不能の症例を除いた34例の追跡期間(6～70か月)の平均値は43.1か月である。MRA検査対象となった患者状況は腎機能不良(24例)、ヨードアレルギー既往(7例)、冠動脈高度石灰化(7例)、ヨード造影剤使用拒否(3例)、外科手術前の冠動脈疾患除外目的、川崎病による冠動脈瘤の経過観察、その他であった。

MRAのみで手術が行われたのは4例(内頸動脈狭窄症、胃癌、副腎褐色細胞腫、直腸癌)であり、術前冠動脈疾患除外のため施行され冠動脈有意狭窄は除外された。その後冠症候群の発症は無かった。

死亡症例の内訳は肺癌(MRA後8か月)、腹部大動脈瘤(1か月後)、心不全(7か月、18か月後)等であり、何れも死因は冠症候群ではなかった。

結論：追跡できた全症例に於いて経過中(MRA後)急性冠症候群の発症は無かった。MRAは腎機能不良、ヨードアレルギー既往、冠動脈高度石灰化、ヨード造影剤使用拒否患者、念のための術前検査、冠動脈疾患経過観察などへの適応があると考えられる。これらの患者へMRAを応用し治療方針決定に有用であった。ただし画像不良例もあるので今後さらなる改良が望まれる。